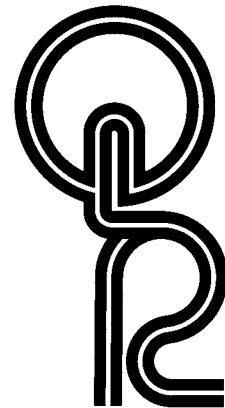


QR Newsletter



第四紀通信

Vol. 20 No.6, 2013



統合国際深海掘削 (IODP) Exp.346 Asian Monsoon 航海で採取された明暗縞が美しい日本海の深海堆積物。ジョイデス・レゾリューション号の船上で、堆積物を観察している様子。写真手前は、日本より乗船した池原 研博士(右)と佐川拓也博士(左)。写真提供：Senior IODP Imaging Specialist, William Crawford

Vol. 20 No. 6

December 1, 2013

学会賞・学術賞候補者推薦募集	2
論文賞・奨励賞候補論文推薦募集	3
Quaternary International	
日本特集号論文募集	4
INQUA2015 開催への募金のお願ひ	4
INQUA と日本	5

INQUA 回想録	8
ASQUA シンポジウム参加報告	9
追悼	10
第2回幹事会議事録	11
住所・所属変更の連絡のお願ひ	12
会員消息	12

◆「日本第四紀学会賞」と「日本第四紀学会学術賞」の候補者推薦の募集

2014年の「日本第四紀学会賞」（以下「学会賞」）と「日本第四紀学会学術賞」（以下「学術賞」）の受賞候補者の受付を開始いたします。両賞は、学会賞受賞者選考委員会が、推薦された候補者の中から受賞候補者を選考し、2014年4月または5月に開催予定の評議員会において受賞者が決定され、2014年総会で表彰される予定です。

「学会賞」：第四紀学の発展に貢献した顕著な業績や活動及び学会活動に貢献した正会員に授与。
学会における最高の賞。毎年若干名。

「学術賞」：第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた正会員に授与。
優れた編書、著書、論文などの一連の業績が対象。対象成果が複数の著者（研究グループ等を含む）によりなされた場合は、筆頭著者または代表者に授与。毎年若干名。

つきましては、下記要領ならびに日本第四紀学会ホームページに掲載されている「日本第四紀学会学会賞規定」及び「日本第四紀学会学会賞と学術賞選考に関する内規」をご参照の上、「学会賞」及び「学術賞」の候補者をご推薦いただきますよう、お願い申し上げます。両賞の募集は今回で7回目を迎えましたが、両賞設立以前から長年にわたりご活躍・ご尽力されてきた方、第四紀学に関連する研究分野を広く世間に広めた方、誰も解決できなかった課題に明快な解答を与えた方、これまでになかった新しい考え方や研究手法を取り入れて成果を出された方など、広くご推薦をいただきたくお願いいたします。ご自分の周囲や専門分野だけでも、この人こそ受賞者にふさわしいという方があれば、ぜひご推薦ください。歴代受賞者につきましては、第四紀学会ホームページの以下のサイトをご覧ください。

<http://quaternary.jp/intro/gakkaisyō.html>

1. 推薦書類：推薦書類には、推薦者名（自薦を含む）、賞の名称、「学会賞」の場合には候補者名及び具体的な業績や活動内容を示した受賞件名と推薦理由（600～800字程度）を、「学術賞」の場合には候補者名及び受賞の対象となる一連の業績を含めた受賞件名と推薦理由（600～800字程度）を記入してください。
2. 推薦書類の提出先
郵送の場合：
〒169-0072 東京都新宿区大久保2丁目4番地12号 新宿ラムダックスビル10階
日本第四紀学会 学会賞受賞者選考委員会 宛
電子メールの場合：daiyonki(at)shunkosha.com
電子メールの件名に「日本第四紀学会 学会賞受賞者選考委員会 宛」と明記の上、
推薦文はテキストファイルの添付書類で送付してください。
3. 推薦書類の提出期限 2014年1月31日（金）【必着】

◆「日本第四紀学会論文賞」と「日本第四紀学会奨励賞」候補論文推薦の募集

2014年の「論文賞」と「奨励賞」の推薦を下記のとおり受け付けます。これらの賞は、過去2年間の「第四紀研究」に掲載された論文とその著者が対象になります。会員の皆様から自薦・他薦によって候補論文と候補者をご推薦いただき、論文賞受賞者選考委員会において受賞候補論文・受賞候補者の選考を行います。受賞論文と受賞者は、2014年4月または5月に開催予定の評議員会において決定され、2014年総会で表彰される予定です。

「論文賞」：会員を含む論文著者全員に授与。毎年1～2件程度。

対象は掲載された全ての論文（短報を含む）。

「奨励賞」：会員である筆頭著者に授与。年齢は2014年4月1日時点で35歳以下。

毎年1～2件程度。受賞者には副賞として5万円の奨学金も授与されます。

つきましては、下記要領ならびに日本第四紀学会ホームページに掲載されている「日本第四紀学会学会賞規定」及び「日本第四紀学会論文賞と奨励賞選考に関する内規」をご参照の上、「論文賞」の候補論文と「奨励賞」の候補者をご推薦いただきますよう、会員各位にお願い申し上げます。これまでの受賞者につきましては、第四紀学会ホームページの以下のサイトをご覧ください。

<http://quaternary.jp/intro/ronbun.html>

1. 選考対象：「第四紀研究」第51巻（2012年）及び第52巻（2013年）に掲載された論説、短報、総説、資料、講座及び特集号の論文。「論文賞」の場合には、著者に会員が含まれることが必要。「奨励賞」の場合は、筆頭著者が35歳以下の会員であること。
2. 推薦書類：推薦書類には、推薦者名（自薦を含む）、賞の名称、「論文賞」の場合には全著者名と候補論文名（巻号頁を明記）及び推薦理由（500～800字程度）を、「奨励賞」の場合には候補者名と推薦論文名（巻号頁を明記）及び推薦理由（500～800字程度）を記入してください。
3. 推薦書類の提出先
郵送の場合：
〒169-0072 東京都新宿区大久保2丁目4番地12号 新宿ラムダックスビル10階
日本第四紀学会 論文賞受賞者選考委員会 宛
電子メールの場合：daiyonki(at)shunkosha.com
電子メールの件名に「日本第四紀学会 論文賞受賞者選考委員会 宛」と明記の上、推薦文はテキストファイルの添付書類で送付してください。
4. 推薦書類の提出期限 2014年1月31日（金）【必着】

◆ Quaternary International 日本特集号への投稿のお願い

産業技術総合研究所 齋藤文紀

国際第四紀学連合第 19 回大会 (INQUA2015 名古屋大会) の組織委員会と日本第四紀学会では、INQUA 日本開催に際し、国際第四紀学連合の機関誌である Quaternary International から日本特集号を出版することになりました。これまでも日本第四紀学会の 50 周年記念行事の一環として行われた国際シンポジウムでは、Quaternary International (QI) から 2 本 (vol. 230, no. 1-2 & vol. 248)、Journal of Quaternary Science から 1 本 (vol. 24, issue 8) の特集号が出版されています。今回は、日本における第四紀研究 (仮題: Japanese Quaternary studies) として、第四紀の幅広い分野を網羅できるような論文構成の特集号にしたいと思っています。著者は、会員、非会員を問いません。また総説と原著、共に受け付けます。QI の Editor-in-Chief の Norm R. Catto 教授からも、すでに特集号の了解を得ています。INQUA 名古屋大会が開催される 2015 年 7 月までの出版を予定しています。

是非この機会を利用して、論文を投稿して頂けますようお願い致します。論文投稿の締め切りは、2014 年 7 月 31 日です (QI のシステムを利用した電子投稿)。投稿を希望する方は、以下の情報を 2014 年 1 月 31 日までに、メールで齋藤文紀までお送り下さい。お送り頂いた情報をとりまとめ、2014 年 2 月に QI の Catto 教授に送付し、投稿受付手続きを始める予定です。

- (1) 担当者氏名と連絡先
 - (2) 予定論文タイトル (英文)
 - (3) 予定著者名 (英文)
 - (4) 論文の内容 (和文 100-200 字程度または英文)
 - (5) 希望する担当編集者 (特集号 Guest Editors: 齋藤文紀、奥村晃史、出穂雅実、鈴木毅彦、横山祐典の中から 2 名を選んでください)
- 送付先: yoshiki.saito(at)aist.go.jp

投稿手続きに関する詳細は、2014 年 2 月に投稿予定者に送付の予定です。

INQUA 名古屋大会に向けて、皆様のこれまでの成果を発信できる絶好の機会ですので、積極的にご参加、ご活用頂けますよう、また日本特集号にご協力頂けますようお願い申し上げます。

日本第四紀学会の 2014 年柏大会 (2014 年 9 月上旬に東大柏キャンパス) では、間もなく募集が始まる INQUA 名古屋大会のセッションに関連したシンポジウムが企画されています。第四紀の幅広い分野を網羅できるようなシンポジウムが計画されておりますので、QI への投稿に合わせて、できましたら柏大会でも参加発表して頂けますようお願い致します。

◆ 「国際第四紀学連合 (INQUA) 第 19 回大会」(2015 年) 開催への募金のお願い

平成 25 年 10 月 12 日

日本第四紀学会 会長 小野 昭

国際第四紀学連合第 19 回大会組織委員会 委員長 齋藤文紀

国際第四紀学連合 (INQUA) の第 19 回大会が 2015 年 7 ~ 8 月に名古屋で開催されることになりました。国際第四紀学連合は、地質年代区分の最も新しい時代である第四紀を対象に学術的に取り組むことを目指して 1928 年に発足しました。4 年毎に大会を開催し、アジアでの開催は 1991 年の北京大会以来で 2 回目、日本で初めての開催になります。第四紀学は、近年ますます重要性を増している地球環境変動・自然災害や人類の歴史などの研究を扱っております。その国際第四紀学連合の大会が初めて日本で開催されることは、当該分野における更なる発展の好機であるとともに、日本社会への大きな貢献の機会でもあります。大会は人口と産業の大部分が第四紀層の上に集積し、環境変動や災害のリスクに立ち向かう日本から、その調査研究の成果を世界に発信するとともに、世界の最先端の成果やアイデアを取り入れるまたとない機会です。

日本第四紀学会と日本学術会議が共同でこの大会を主催する予定で、大会開催にあたりましては、社会のための第四紀科学として、「第四紀学からみた気候変動・自然災害・文明」を統一テーマとして、皆様方のご協力をお願いしながら、大会の成功を実現させたいと考えております。

日本招致にあたって、大会運営総予算の 1 割をアジアを中心とした発展途上国からの参加者や若手研究者への支援に割り当てることを謳っており、募金目標額の 600 万円を当該予算に使用したいと考えております。本大会の意義をご斟酌いただき、ご助力を賜ることが出来ますようお願い申し上げます。なお、寄付の方法に関しましては、以下に記します「会議の概要と寄付金募集の要領」をご参照下さい。

会議の概要と寄付金募集の要領

1. 会議の名称とテーマ
 名称：国際第四紀学連合 (INQUA) 第 19 回大会
 テーマ：「第四紀の環境変動・自然災害・人類進化の解明と将来予測」
2. 主催・共催機関等
 主催：国際第四紀学連合第 19 回大会組織委員会、日本学術会議、日本第四紀学会
 共催：日本地質学会、日本地理学会、日本考古学協会、日本人類学会ほか (計 40 団体)
3. 開催期間 2015 年 7 月 27 日 (月) ~ 8 月 2 日 (日)
4. 開催場所 名古屋国際会議場
 所在地：〒456-0036 愛知県名古屋市熱田区熱田西町 1 番 1 号
 連絡先：電話 052-683-7111 ファックス 052-683-7777
5. 主催責任者
 国際第四紀学連合第 19 回大会組織委員会
 委員長 齋藤文紀 (産業技術総合研究所)
 副委員長 遠藤邦彦 (日本大学 名誉教授)
 奥村晃史 (広島大学 教授、国際第四紀学連合副会長)
 名誉委員長 杉村 新 (国際第四紀学連合名誉会員、神戸大学 元教授)
 事務局長 吾妻 崇 (産業技術総合研究所)
 事務局：〒305-8567 茨城県つくば市 1 丁目 1-1 中央第 7 事業所
 産業技術総合研究所 活断層・地震研究センター内
 E-mail : 2015inqua-sec-ml(at)aist.go.jp
 電話 : 029-861-2489
 国際第四紀学連合第 19 回大会組織委員会事務局
6. 参加予定国・人数
 約 50 ヶ国・1,100 名
7. 募金の名称 国際第四紀学連合第 19 回大会 寄付金
8. 募金予定額 600 万円
9. 募金額 1 口：1 万円 (法人の場合は、1 口 5 万円)
10. 募金方法
 - (1) 一般郵便口座
 口座名義：国際第四紀学連合第 19 回大会組織委員会
 ゆうちょ銀行 普通 53236691
 - (2) 寄付金交付金制度
 本国際会議は、日本政府観光局 (JNTO) の寄付金交付金制度の利用承認を受けています。この制度を利用すると、寄付金に対する税制優遇措置を受けることができます。希望される方は、申請資料を郵送しますので、上記の事務局宛にメールでご連絡下さい。この制度の詳細については、日本政府観光局ホームページ (<http://mice.jnto.go.jp/>) でご確認頂けます。

◆ INQUA と日本 (2) 第四紀の始まり

産業技術総合研究所 齋藤文紀

前回は、INQUA 大会への日本人の参加は、第 3 回のウィーン大会は登録のみで参加せず、第 4 回が最初であったことを述べた。今回は、「第四紀」の言葉が使われ始めた頃について報告する。

Geology (Geologie) が地質学と訳されたのは、江戸末期の箕作阮甫 (みつくりげんぽ) とされている。彼の自筆本である「地殻図説」に関して望月 (1948) は、「はじめゲオロジーを地學と譯し、のちに朱をもって質の字を加えている。地質學という名はこの時にはじめられたと思われる」と記している。次の自筆本の「地質辨證」は文久元年から 2 年 (1861-1862) にできており、「地質」がタイトルに用いられている。江戸末期に幕府は、

安政 6 年 (1859) 6 月の貿易開始以降、英語の圧倒的な優位性を痛感し、英語の辞書を作成する。文久 2 年 11 月 (1862) に、「英和对訳袖珍辞書」を、また博物学用語を補充・訂正し、慶應 2 年 (1866) に「改正増補英和对訳袖珍辞書」を出版する (宮地, 1997)。geology の訳は、文久 2 年版では地理学、慶應 2 年版では、地質学となっており、箕作阮甫の訳がこの間に反映されていることを示している。その頃のオランダ語の辞書「和蘭字彙」やフランス語の辞書「仏語明要」には、geology に対応する語は含まれていない。

丁度同じ頃の文久元年 (1861) には、函館奉行が蝦夷地の鉱山開発のためにアメリカから地質兼

鉱山技師のブレイクとパンペリーを招き、彼らは翌年の文久2年2月に来日し、5月から8月まで北海道の地質調査を行い、同年にブレイクは、地質図をまとめている。近代的な地質調査の始まりである。

明治に入り、明治5年(1872)の師範学校の設置に合わせて、同年に教科書である「官版地質学」(瓜生寅・菌鑑譯述)が文部省から出版され、更に東京大学の設置の前年の明治9年(1876)に、箕作阮甫の孫の麟祥が中心となって、文部省から百科全書の出版が始まる。「Chambers's Information for the People」の全訳で、この第2巻が「地質学」(geology)である(「地質学」:全/柴田承桂譯,文部省)。また明治4年からは開拓使が総数76名にも及ぶ技師を諸外国から招聘し、ライマンもその一人として明治5年11月に来日する。明治5年には東京に開拓使仮学校が開校し、物理、化学、機械、鉱山、地質、建築、測量、植物、動物、農業などが講義された。この仮学校が明治8年に札幌農学校となる。ライマン他が北海道の地質をまとめた「日本蝦夷地質要略之図」が出版されたのが、明治9年(1876)5月10日である。この英文説明書「A general report on the geology of Yesso」が翌年の明治10年(1877)に出版され、明治11年(1878)に日本語版の「北海道地質総論」が開拓使から出版される。

一方ライマンとは別に、ナウマンは明治8年(1875)に来日し、9年に開成学校の教授となり、翌10年に東京大学の新設とともに理学部の教授となる。国家的な規模で全国の地質調査を組織的に行うことを感じた彼は、助教の和田維四郎を、明治11年(1878)5月10日に内務省地理局に改変設置された地質課に送る。そして翌12年に地質図幅調査計画を立案し政府に具申する。明治12年(1879)にライマンも地質課に兼務後、東大を満期解傭する。明治15年(1882)に、地質

課は地質調査所と改称される。ナウマンの後任となった理学部の教授が、ブラウンスである。理学部紀要(Memoirs)から明治14年(1881)に出版されたブラウンスの「Geology of the Environs of Tokio」は、翌明治15年(1882)に助教授の西松二郎によって訳され、同じく紀要(理科會粹)から「東京近傍地質篇」として出版される。ナウマンの「江戸平原論」(1879)や、ブラウンスの研究が日本における平野地質の始まりである。

明治の初期に、第四系はどのように記載されていたのだろうか。ライマン他の「日本蝦夷地質要略之図」(1876)では、第四系は、New Alluvium(新沖積層)とOld Alluvium(古沖積層)に分けられている。古沖積層は、「北海道地質総論」(1878)の開拓使訳ではDiluviumに対比されている。この頃の調査は、ライマンやナウマンらの海外からの専門家が同行して行われたが、日本人による最初の調査が、明治12年(1879)に地理局地質課の和田維四郎らによって伊豆で行われる。その報告の中で、第四系(沖積地)が「クワルテール」として記載される(橋爪・和田,1879)。そして、明治12年(1879)に東京大学を卒業した小藤文次郎が、地理局地質課に内務省御用掛として採用され、石川県加賀国手取川の調査を行い、明治13年(1880)6月に勸農局地質課から報告書が出版される(小藤,1880)(図1)。この中に、初めて「第四紀」という名称が用いられる。「第三紀」「第二紀」も同様である。これ以前は、「最初層、第二層、第三層」「第一創岩、第二創岩、第三創岩」「第一地層、第二地層、第三地層」「第二期、第三期」などと訳されていたが、「紀」が使われたのは、小藤(1880)が最初である。なぜ、この報告から「紀」が使われるようになったのか、その背景の推察は後述する。歌代ほか(1978)「地学の語源をさぐる」では、富士谷(1883)を第三紀と第四紀の最初としているが、小藤(1880)が最初であろう。

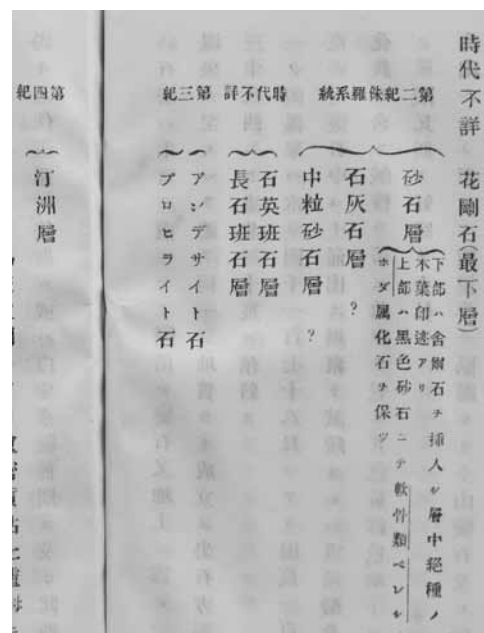
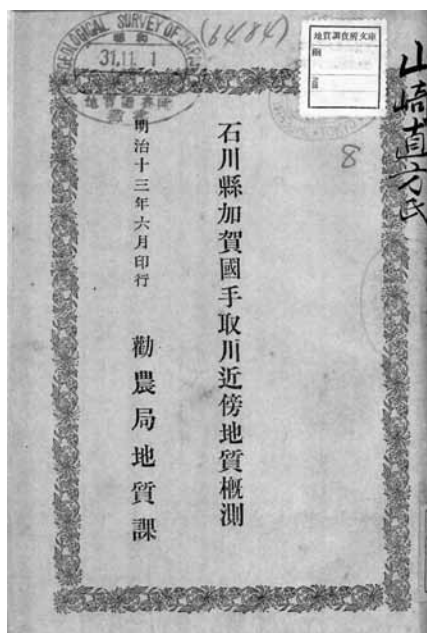


図1. 小藤(1880)の報告書表紙と「第四紀」の記述。

英語の「Quaternary」が最初にてでくるのは、ナウマンの後任の東大教授ブラウンスの明治14年(1881)「Geology of the Environs of Tokio」で、これを全訳した助教授の西松二郎の明治15年(1882)「東京近傍地質編」にも小藤と同じく「第四紀」が用いられている。英語の Quaternary は、ブラウンス以降使われなくなり、地質調査所から1884年から出版され始めた図幅も「Quartery」となっている。神保(1889)で Quaternary が再度用いられ、神保(1992)以降は、図幅でも Quaternary が使われるようになる。

なぜ小藤(1880)から「紀」が使われるようになったのだろうか。小藤文次郎は明治12年(1879)に東京大学を卒業し、地理局に調査員として採用され、石川県加賀国手取川近傍の地質調査をし、その結果が明治13年(1880)6月に勸農局地質課から出版される。明治11年5月3日に地理局に地質課ができ、5月13日に東京大学助教の和田維四郎は内務省御用掛に兼務となる。同年、和田は山梨県甲斐国の調査を試験的に行い、翌明治12年には地質課によって伊豆での調査が行われ、同年これらの成果が報告される。これらの報告では、新層(ケノヅオイック)、古層(パレヲツオイック)が使われている。

明治12年(1879)は、日本の地質調査において大きな変化の年であった。前年にナウマンが政府に日本全国の地質調査とそれを遂行する組織の必要を具申し、内務卿の伊藤博文から明治12年5月3日に太政大臣三條實美に伺いが出され、5月20日に採択される。6月には和田が地質課長心得となり、7月にはナウマンが技師長として地質課に加わり、8月16日には東京大学を満期解傭となる。地質課は、9月には庶務・会計・地質・土性・地形・分析の6係体制の機構ができあがった。ナウマンが提案した内容は、事務関係を除いて40名以上の体制とし、北海道を除く全国の20万分の1の地質図、地形図、土性図、それぞれ93枚を12年間で完成させるというものであった。

和田とナウマンが地質課の実権を握り、全国の地質図をつくる作業が始まろうとした時に採用になったのが、小藤文次郎である。この新規の体制の下で地質調査が行われ、最初に出た報告書が明治13年(1880)の小藤の報告である。全国の20万分の1作成のために統一した凡例、地質系統の議論がされたであろう。それを反映したのが小藤の報告書の「紀」ではないだろうか。小藤の報告後、明治14年(1881)に東大を卒業した富士谷孝雄は地質課に入り、明治15年(1882)には東大助教授に出向する。彼は海外の文献をとりまとめて、明治16年(1883)に「地学要略」を出版する。この本は、前書きを地質調査所所長兼東大助教授の和田維四郎が書き、1883年にウィーンから帰国し、地質調査所の職員となった原田豊吉が校閲を行っている。原田は、1882年にミュンヘン大学で学位を取得し、オーストリアの国立地質調査所で勤務していた経歴を持つ。当時の最先端の情報をとりまとめたこの本では、原始紀又は古生紀、第二紀又は中生紀、第三紀又は新生紀、

そして第四紀が採用されている。

小藤の報告書は明治13年6月に出版され、小藤は同年10月にドイツに留学する。明治17年(1884)4月に帰国して5月に東京大学講師となり、翌年に教授となる。小藤は明治17年に帰国後、「金石学・一名鉱物学・全」を出版しており、この中に年代区分と地質系統が示されている。地層と年代を明瞭に区別して記載した初めての出版物ではないだろうか。面白いことに、この中では「第三紀、第四紀」は採用しておらず、独自の年代区分と地質系統を提案している(たとえば、原始元と原始大統、太古元と太古大統、中古元と中古大統、近古元と近古大統: 沖積紀と沖積層、洪涵紀と洪涵層)。小藤自身は、小藤(1880)で第三紀や第四紀を用いたが、納得していなかったのかも知れない。

明治15年(1882)2月13日、地質課は農商務省直轄の地質調査所として独立し、明治18年(1885)から20万分の1地質図幅を出版してゆく。用いた名称は、小藤の地質系統ではなく、より現在使用しているものに近い(原田, 1890)。両者の違いは明白で、北海道庁技師であった神保小虎は、明治23年(1890)「北海道地質略論」の中で、用語の混乱が生じていることを指摘している。現在の新生代と新生界、第四紀と第四系は、神保(1892)では、第四代近古代第四紀だが、原田(1990)では、新生界第四系(ただし、Quartery)、長濱(1892)と横山(1896)では、新生代と新生界、第四紀と第四系となっており、現在と同じである。第四紀の英語の Quaternary が復活するのも1892年頃からであり(神保, 1892; 大阪図幅ほか)、この頃現在の用語に落ち着いたようである。

原田豊吉(1890)本邦地史系統一覽. 地学雑誌, 2, 409.

富士谷孝雄(1883)地学要略. 133p.

橋爪源太郎・和田維四郎(1879)静岡県管下伊豆国地質取調報告. 地理局, 52p. 付図.

神保小虎(1889)北海道地質略説. 地学雑誌, 1(2), 39-46p.

神保小虎(1890)北海道地質略論全. 北海道廳, 93p.

神保小虎(1892)増訂 新編地質学. 内田老鶴圃, 204p.

小藤文次郎(1880)石川県加賀国手取川近傍地質概測. 勸農局地質課, 22p. 付図.

宮地正人(1997)混沌の中の開成所. 東京大学総合研究博物館, http://www.um.u-tokyo.ac.jp/publish_db/1997Archaeology/01/10300.html

望月勝海(1948)日本地学史. 平凡社全書, 184p.

長濱兼吉(1892)地質学新書. 普通学全書第22篇, 富山房, 215p.

歌代勤・清水大吉郎・高橋正夫(1978)地学の語源をさぐる. 東京書籍, 195p.

横山又次郎(1896)地質学教科書. 富山房, 363p.

◆ INQUA 回想録 INQUA 大会時の野外巡検

首都大学東京名誉教授 町田 洋

これまで私が INQUA 大会に出席したのは、1973 年以降 1982 年モスクワ大会と最新の 2011 年スイス・ベルン大会を除く次の 8 大会であった。1973 年第 9 回ニュージーランド・クライストチャーチ、1977 年第 10 回イギリス・バーミンガム、1987 年第 12 回カナダ・オタワ、1991 年第 13 回中国・北京、1995 年第 14 回ドイツ・ベルリン、1999 年第 15 回南アフリカ・ダーバン、2003 年第 16 回アメリカ・リノ、2007 年第 17 回オーストラリア・ケアンズである。

大会そのものも、もちろん最新の研究方法や成果を知り討論する貴重な機会であるが、field work を中心にしてきた私にとっては、大会時に催された野外巡検は、深い印象に残るものがあった。どれも各地域独特の現象に目を開かせる機会であったが、その中で最初のニュージーランド・クライストチャーチ大会の前後に 17 日間もかけて北島と南島の主要な見どころを巡った 3 コースの旅はいまだに深く記憶に残っている。この時の印象のいくつかを記そう。

ニュージーランド北島最初のコースの案内リーダーは Te Punga 教授で、露頭への案内のみならずすべてのことに気遣ってくださり献身的であった。案内者と多くの国からの参加者も互いに親密になれる雰囲気だった。そして多数の研究者（第四紀研究以外の専門家も動員）が自分の専門とするところを熱心に、また互いの関連性をなるべく意識して説明・討論しようとするのもよかった。

ニュージーランド北島のテフラ研究は特定の新しいテフラと土壌の肥沃性との関係から始まったことが知られている。ニュージーランドでは氷期に植被が乏しかった（周氷河性）地域が広がったため、そのときにレスが厚く堆積し、古土壌とともにテフラの層序研究に重要な役割を果たしている。この点テフラ層序がレス・古土壌のそれと関連し、氷期・間氷期の環境変化とより直接的につながり、レスがほとんどない日本にとって示唆に富む点が多かった。また大規模カルデラと新旧の大火砕流堆積物・降下テフラは、日本と共通する話題である。また明瞭な横ずれ断層とその変動史の証拠を詳しく見せてくれた。ルアペフ火山に現存する氷河とその後退史を氷食地形・堆積物から案内してくれた。

一方石灰岩洞窟の真っ暗な地下川をボートにのって神秘的に輝く土ボタルを探検気分を観察したことも巡検に一息入れてよかった。また独特の進化をとげた多くの珍しい固有種とその生態史の解説も興味深かった。新しい時代になってはじめてポリネシア地域、遅れて欧米から人の入植・定着が進み、その後民族間の融和に至ったこと、また人為による環境破壊の進行なども話題となった。マオリの伝統行事の見物なども折り込まれた。このように観察対象はバラエティに富むように工夫され、参加者を楽しませてくれた。

南島の巡検はなんといってもサザンアルプスの氷食地形・周氷河地形や断層地形、海成段丘が主役であった。セスナ機を使つての南島西岸の著名な山麓氷河（Franz Josef, Fox）の観察、海拔約 1600m 高位準平原の平坦な山稜（Old Man Range）に多数のトアが立ち、各種の周氷河地形をみるために、何台も 4 輪駆動のジープが用意されてせまいラフロードを走り回ったことはとくに印象深い。

私にとつてとくに面白かったのは、南島西岸の南緯 43° 付近で、モレーンやアウトウオッシュの地形と海成段丘（海蝕崖、海成層）がともに発達している地域の地形・地質であった。ここでは低緯度から高緯度に行くにつれて谷氷河の地形が発達し、氷期の端モレーンは低下して海岸に達している。さらに南下するとそれは現海面下に水没して氷食谷はフィヨルドとなる。端モレーンが現海岸に位置しているところには間氷期の海成段丘が分布している。いうまでもなくここでは間氷期には海進が、氷期には海退が起こったという、教科書で一般化されるモデルが目の前に展開しているのである。もちろん海進海退の年代決定は重要である。当時ニュージーランドでは、最終氷期・最終間氷期の層序（それぞれ Otira, Oturi）、もう一つ前のサイクル（Waimea, Terangi）、その前の氷期（Wainaunga）の層序が提唱されていたが、それぞれの絶対年代については確実性に欠けていた。年代測定法と資料は限られていた。とくに南半球と北半球の氷期・間氷期層序が対比でき、気候変化が異なる地域間で厳密に同期したかどうかは国際的な課題であった（現在に続く課題）。そのためニュージーランドでも独自に編年する必要があったのはいうまでもない。信頼できる編年の確定が急がれていたのである。北島ではテフラが年代の指標になるが、氷河地形・地質のよく発達する南島にはほとんど分布しない。巡検時は、わずかに南島の北部で広域火山灰（Taupo カルデラ起源の Oruanui 火山灰、現在は Kawakawa と呼ばれる）が同定され始めて年代決定に利用できるかという態勢になった時期であった。テフラ研究者の Vucetich さんはある露頭の前で、これではないかと土のサンプルを舐めて味を確かめる（ガラスだと舌に吸い付く感触ありという）茶目っ気あるポーズをとったことを思い出す。

いうまでもないことだが、巡検には新進気鋭の人に加えて、世界の研究のリーダーシップをとる著名な研究者も参加しているので、交流を踏むのには絶好のチャンスである。本大会でももちろんチャンスはあるが、数日間行動を共にする巡検は、より貴重な機会になると感じた。

なおクライストチャーチでの本大会で記憶に残っていることがある。私は第四紀後期の海面変化の問題を南関東のテフロクロノロジーを用いて発表した。そのすぐ後の発表は Arther Bloom さんによるパプアニューギニア・ヒューオン半島の隆

起サンゴ礁から同じ問題を解明するもの（よく知られている）であった。発表後会場前で顔を合わせた Bloomさんと私は、互いに方法は違うがよく似た結果が得られたものだと、握手したことを覚えている。

また本大会とは別に、ほぼ4年ごとに行われるINQUA研究委員会の野外集会にもしばしば参加した（Iceland, Yellowstone, New Zealand, Auvergne, Dawsonなど）。この種の巡検は参加者の関心のあるテーマと一致するので、それなりに意義があるのは当然だが、第四紀学を特色付ける多くの分野の交流という点ではやや欠ける。本大会に関連して計画された巡検では、第四紀研究を特色付ける分野間の交流をとくに意識したものであるべきである。これによってともすれば狭い分野に籠りがちな若い研究者の目が開くことが期待される。私にとって1973年のニュージーランド巡検は、この意味で広領域に及ぶ第四紀学の面白さを感じる非常によい経験になった。

ニュージーランドには手つかずに近い美しい自然がかなり残っているし、自然に親しみ興味を持っている一般人が多いのは羨ましかった。あるピクニックランチの折、何人かの参加者が集まって、それぞれのお国自慢が始まったことがある。その中で、胸を張って北欧からの参加者が口にした「わが国には手つかずの自然が豊富に残されており保護しているのは誇れる」は、自然破壊の進んだ土地に住むわれわれには羨ましいことであった。

◆第2回ASQUAに参加して

第2回ASQUA（Asian Conference on Quaternary Research）が9月8日から15日までロシアのUlan-Udeで開催されました。2009年に北京で開催されてから4年ぶりに開かれたものです。もともこの会は日本第四紀学会発足50周年記念国際シンポジウムの折に結成されたもので、INQUA開催の中間にアジアで開催されることになっています。

シンポジウムはバイカル湖畔のOymur村のバンガローを貸し切って合宿形式で行われました。参加者はロシアをはじめ中国、日本、韓国、台湾、モンゴルなどのアジア諸国からと同時に英国、米国、ドイツ、オーストリアなど地域外からの参加者もあり、総勢は40名を超えていると思われます。日本からは私と近畿コンサル会の鈴木達彦氏の2名でした。第2回の北京では大勢いたのに少し寂しい限りでしたが、主催のDr. ErbajevaさんをはじめGeological Institute of Ulan-Ude, Siberia Branch of Academy of Science, Russiaの皆さんの

ニュージーランド大会以後、いくつかのINQUA大会時の巡検に参加したが、カナダ・オタワ大会前に行われたカスケード山脈の巡検を除くと、これはどうかと思うようなものもあった。個性派が多い国民性なのかあるいは国際会議に慣れているためか、参加者をそっちのけにして案内者間で議論をかわす巡検（それはそれで面白いが）もあり、後味がやや薄かった記憶もある。

さて開催が間近にせまってきた日本。名古屋大会でも多くの地域の野外巡検が企画されている。海外からの参加者、とくに若い人は日本列島でどんな印象をもつことであろうか。野外巡検は非常に重要な役割をもっていると思う。もちろん変動帯としてのユニークな地形地質が主要な話題となろう。しかしそれぞれ違った経験と興味をもつ参加者に満足してもらうためには大いに工夫する必要がある。押し付けがましくなく、さまざまな特性をもつ世界各地の第四紀地形地質との違いや類似性（あるいはグローバルな観点）を考慮して計画・案内するべきではなかろうか。

名古屋大会での野外巡検で問題になるのは、露頭がきわめて少なくなったこと、これには案内者は頭を抱えることであろう。また真夏の暑熱も障害となろう。そのかわりにいくつかの長い試錐も行われコアの分析も進んだ。周りには広大な海と海底の試料がある。これらも巡検に生かしたいものである。

大阪市立大学名誉教授 熊井久雄

献身的な努力で会はずスムーズに進行されました。

口頭発表はINQUA Commission on Stratigraphy and ChronologyのPresident Professor Gibbard氏の第四紀層序に関する現状報告など3日間に28件、その他ポスターセッションが10件程度ありました。Gibbard氏の講演では千葉セクションに関する評価など、かなり詳しく話されました。

シンポジウムが終わった後はUlan-Ude市に戻り、ここを拠点に市郊外のTologoi遺跡など3か所の巡検がなされました。この間は天候の変化が激しく、Tologoiでは見学中に降雪にあい寒い思いをしましたが、翌日の巡検は快晴に恵まれ、シベリアの自然を堪能できました。岳樺が黄色く「紅葉」し、今、正に仲秋と言うところでした。

次回のシンポは韓国で開催されることが決まりました。また、これまでなかったASQUA Presidentが設置されることになって、韓国のProfessor Kimさんが選ばれ、次回開催の準備を進めることになりました。

◆小池一之さんを偲んで

国立台湾大学地質科学研究室特別招聘教授 太田陽子

本会会員、駒沢大学名誉教授の小池一之さんは8月23日に心筋梗塞のため急逝された。小池さんへの追悼文をしたためるとは思いがけないことである。長い交流があり、よき研究仲間であった小池さんに心から追悼の意を表したい。

小池さんは日本第四紀学会では1979～1981年には幹事を、1987～1989年に幹事長を務められ、学会の発展に貢献された。急逝されたのは日本第四紀学会に参加のために宿泊された弘前であった。最後まで学会と関連したままの御逝去であった。あまりにも唐突な御逝去で、最後のお姿をみていないだけに、いまだに小池さんがなくなられたとは信じられない。

いうまでもなく、小池さんは海岸地形研究、とくに海岸の人工改変に関する研究の第一人者で、IGUの国際会議には度々出席され、日本の研究の紹介につくされた。IGUに深くかかわっておられるルイジアナ州立大学のウオーカー教授からは彼の急逝を悲しむ弔辞をいただいた。小池さんは多くの国内外の学会の行事に積極的に参加された。忘れられない思い出の一つは、私がIGCP、INQUAの活動の一環として1983年に海岸線に関する国際会議の日本での開催をひき受けたときのことがある。その際に、亡き吉川虎雄さんを委員長にお願いし、米倉伸之さん、小池一之さんと私が委員として会を運営し、多くの参加者を得て盛会であった。小池さんは会場として駒澤大学の講義室を用意してくださり、会議の円滑な進行に多大な協力をいただいた。考えてみるとこの会議の運営に当たった上記の方々が私を除いてすべて故人となられた。本当にさびしい限りである。

小池さんにはたくさんの著書（「海岸とつきあう」、1992、岩波書店）、訳書（「一般地質学」、共訳、1983-1984、東大出版会）、共編著（「変化する日本の海岸」、1996、古今書院）などがある。さらに1980年代以降には、貝塚爽平さんを中心とする「写真と図で見る地形学」、1985、「日本の地形、全7巻」、2000-2007、などの共編著がある（いずれも東大出版会）。私はこれらの著書の編著者の一人として最近20年あまり小池さんと親交を深めていた。私たち数人は2月に一度くらいの割合で

編集会議を開き、議論を重ねてきた。これらの会議は、本を作るよりも議論を楽しむ会の観があったと東大出版会編集部の小松さんにいわれたが、小池さんは沸騰する議論を何時もうまく取りまとめてくださった。これらの編著者のうちで、すでに貝塚爽平、米倉伸之のお二人を失っていたが、今、また小池さんともお別れすることになってしまった。哀惜の念にたえない。

小池さんはまた教育者としてもすぐれていて、教え子で地形学や第四紀学で活躍している人も多い。彼は友情に厚く、海外から共同研究者が訪れたときには富士山麓まで車を出してドライブを楽しんだり、包丁とマグロのさくを持参して私の家で調理に腕を振るってくださったこともある。なつかしい思い出である。今回もこれらの仲間と会合を開くことを検討していた矢先に、悲しい知らせを聞くことになってしまった。私が勤務先の横浜国大を定年退職するにあたって、彼は非常勤講師のポストを用意してくれ、5年間駒沢大学でお世話になった。講義が終わると小池さんの研究室に立ち寄って会話を楽しんだものである。まだ読んでいなかった新しい文献を教えていただいたこともまれではない。



駒澤大学文学部地理学科創立75周年記念誌
駒澤地理41号別冊付録CD-ROM写真集
(2005年)より

小池さんは水戸の出身で、お酒が大好きで、飲んでは語ってやまなかった。一見豪放磊落な観があるが、一方家族思いのやさしい人柄であった。夫人のとみ子さんがずっと教職をもっておられたので、家事に積極的に協力し、食事の準備を分担されており、また団地に住んでおられたときには託児所の設置に力を注いだと伺っている。御家族の悲しみは察するにあまりある。心から御冥福をお祈りする。

◆日本第四紀学会 2013 年度第 2 回幹事会議事録

日時：2013 年 10 月 12 日（土）14:00～17:00
 場所：東京工業大学キャンパス・イノベーション
 センター内 広島大学東京オフィス 408 号室
 出席：小野会長、奥村、斎藤文紀、吾妻、北村、小森、
 水野、齋藤めぐみ、米田
 事務局：中野
 欠席：藤原、岡崎、卜部、佐藤、宮内、出穂

報告事項 庶務

1. 公益財団法人未来工学研究所より依頼のあった「学協会における科学技術研究の多様性の確保についての調査」に対応した。
2. 井上 淳会員から、井上 淳・北瀬（村上）晶子、2010、湖沼堆積物中の燃焼痕跡物として記録された後氷期の間活動。第四紀研究, 49, 173-180 の図 4 の転載許可願（予定転載先：井上 淳・奥平敬元・北瀬（村上）晶子、地質学雑誌）があり、これを許可した（20130827）。
3. 大手前大学から、春成秀爾、小野 昭、小田静夫、日本第四紀学会編（1992）「図解・日本の人類遺跡」東京大学出版会の p.185 図, p.186 図, p.171 図 p.187 図の転載許可願（予定転載先：e ラーニング科目「考古学の世界」）があり、これを許可した（20130926）。
4. 地盤工学会より、地盤工学会賞推薦依頼があり、対応した。
5. 国際土壌科学会議 (IUSS) の Division, Commission の Chair, Vice-Chair 選挙への投票依頼があり、幹事会で対応した。
6. 「地質・地盤情報活用促進に関する法整備推進協議会」へ参加申請し、承認された。斎藤文紀会員と植木岳雪会員が担当することとした。
7. 富士学会より、2013 年秋季学術大会後援依頼があり、了承した（20131010）

編集

1. 編集委員会を 9 月 28 日開催し、論説 1、短報 1 を条件付きで受理し、52 巻 6 号（12 月号）に掲載する。このほかに 2 編の書評を掲載する予定である。
2. 2013 年大会の特集は小岩直人会員が中心に取りまとめることとなった。
3. 奥野 充会員より、中村俊夫会員による 2012 年学会賞受賞記念論文受賞論文と合わせて、炭素年代測定関係の論文を集めて特集号とする企画が提案され、編集体制とタイムスケジュール等について詰めることを条件に承認した。

会計

1. 各研究委員会へ予算を通達した（20130911）。
2. 通信 20 巻 5 号に関する広報書記へアルバイト代を承認した（20131003）。

広報

1. 洪積層に関わる Q and A の対応を確認した。

事務局

1. 会員動向

<入会>

橋詰 潤（明治大学 黒耀石研究センター）

<所属・住所異動>

伊藤谷生（帝京平成大学 現代ライフ学部）

田原敬治（和歌山県環境生活部環境政策局環境生活総務課自然環境室）

2. 6 件のパンフレット等学会への連絡物があった。① 2013 年京都国際地理学会議開会式・閉会式 DVD (2013 年京都国際地理学会議組織委員会)、② 地域研究 (立正地理学会)、③ 日高舟状海盆表層堆積図 (産業技術総合研究所)、④ 奥尻海盆表層堆積図 (産業技術総合研究所)、⑤ 第四紀の新定義と東海層群模式露頭 (松葉千年先生)、⑥ 富士学会 2013 年秋季学術大会 後援依頼 (富士学会)

審議事項

1. 年間計画を確認した。
2. 選挙制度検討委員会・会員サービス向上検討委員会委員候補を検討した。
3. 第 2 回定例評議員会・学会賞受賞者講演会・シンポジウムなどの日程・内容を検討し、研究委員会にシンポジウムの開催予定を確認することとした。
4. 2015 年大会会場について意見交換し、8 月後半から 9 月前半に開催することとし、千葉大学園芸学部、千葉科学大学、早稲田大学に開催を打診することとした。
5. 講演要旨集の残部の処分について検討し、ダンボール 1 箱を保管し、残りは廃棄することとした。
6. 日本第四紀学会 法務委員会規定の一部改正を検討し、次回評議員会に諮ることとした。

現行

(目的)

第 1 条 本規定は、日本第四紀学会会則第 6 条 4、第 14 条の 1 に基づき、

改正

(目的)

第 1 条 本規定は、日本第四紀学会会則第 6 条 4、第 15 条の 1 に基づき、

7. 日本第四紀学会 研究委員会内規の一部改正を検討した。

現行

1. 研究委員会は、会則第 17 条に基づく特別委員会の一つで、第四紀学の特定の研究課題についての国内・国外の情報を交換し、研究を推進するためのグループである。

改正

1. 研究委員会は、第四紀学の特定の研究課題についての国内・国外の情報を交換し、研究を推進するためのグループである。

8. INQUA 開催について、官公庁・研究機関・博物館への共催依頼について審議し、これを了承した。また、会長名・INQUA 大会委員長名で会員へ募金を周知することを了承した。

9. INQUA 開催に合わせて、Quaternary International に特集号を組むことを了承した。詳細は齋藤文紀会員が検討することとした。

10. 来年度の地球惑星科学連合大会へのセッション提案について承諾した。

11. アルバイト代を時給 1000 円に一元化することとした。

◆住所・所属機関に変更があった場合には、連絡をお願いします

会員の皆様に、「第四紀研究」や「第四紀通信」をお送りしたり、会費請求書をお送りする宛先は、皆様から事務局に届けてある住所あるいは所属機関のどちらか一方です。転勤や退職などで住所や所属機関が変更になった場合、あるいは送付先を変更される場合には、速やかに下記事務局あて、ご連絡ください。送付先が変わっても連絡をされずにいると、「第四紀研究」や会費請求書がご本人に届かずに、宛先不明で事務局に戻ってくる場合があります。実際に、会費長期滞納者の方には、このように連絡先不明のために、会費請求書がご本人に届いていないケースが多く見受けられます。

もし、皆様の周囲で、最近「第四紀研究」や会費請求書がきていないといっている会員の方を見かけたら、それは送付先が変更になっても事務局に届け出ているためである可能性が高いため、送付先を事務局に連絡するようにお伝えください。

住所・所属機関変更の連絡先：

〒169-0072 東京都新宿区大久保 2 丁目 4 番地 12 号 新宿ラムダックスビル 10 階
株式会社春恒社 学会事業内 日本第四紀学会事務局

E-mail : daiyonki(at)shunkosha.com 電話 : 03-5291-6231 FAX : 03-5291-2176

★★★ 第四紀通信に情報をお寄せ下さい ★★★

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。

広報幹事：齋藤めぐみ (memekato(at)kahaku.go.jp) 宛にメールでお送り下さい。

第四紀通信は奇数月月上旬原稿締め切り、偶数月 1 日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下が完成した段階でホームページに掲載するよう努力しています。奇数月 15 日頃にはホームページにアップするようにしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会 国立科学博物館 地学研究部 齋藤めぐみ
〒305-0005 茨城県つくば市天久保 4-1-1 FAX : 029-853-8998

広報委員：那須浩郎・糸田千鶴 編集書記：岩本容子

日本第四紀学会ホームページ <http://quaternary.jp/> から第四紀通信バックナンバーの PDF ファイルを閲覧できます。

日本第四紀学会事務局

〒169-0072 東京都新宿区大久保 2 丁目 4 番地 12 号 新宿ラムダックスビル 10 階
株式会社春恒社 学会事業部内

E-mail : daiyonki(at)shunkosha.com 電話 : 03-5291-6231 FAX : 03-5291-2176